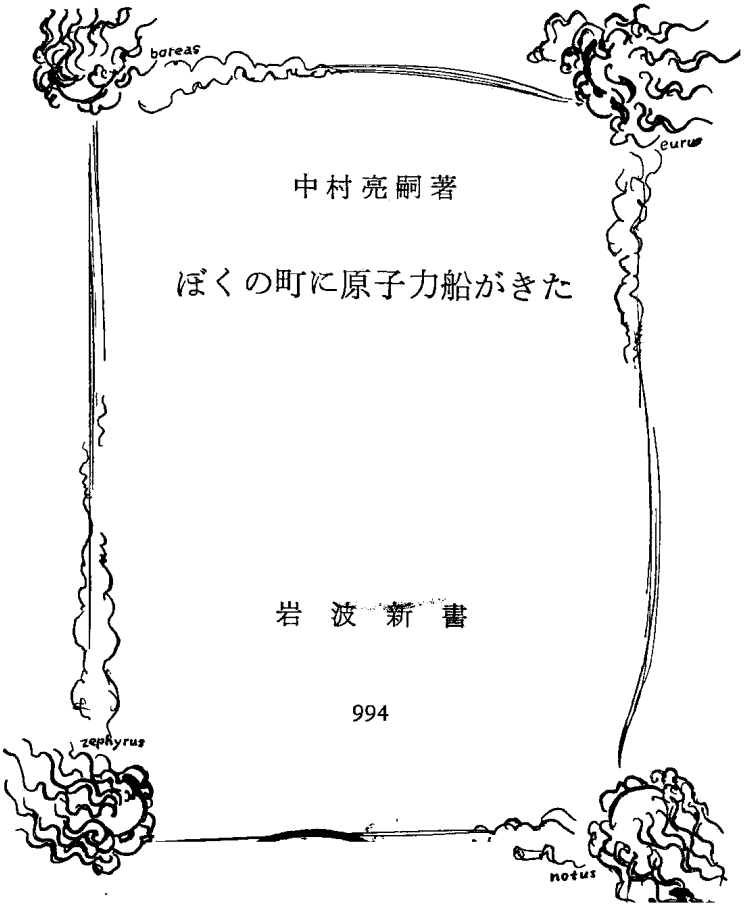
中村亮嗣著

ぼくの町に原子力船がきた

岩波新書

994



中村亮嗣著

ぼくの町に原子力船がきた

岩波新書

994

中村亮嗣

1934年青森県下北郡田名部町に生まれる
1952年青森県立田名部高校卒業
現在一画家，歯科技工士

ぼくの町に原子力船がきた　　岩波新書（青版）994

1977年2月25日　第1刷発行 ©

¥280

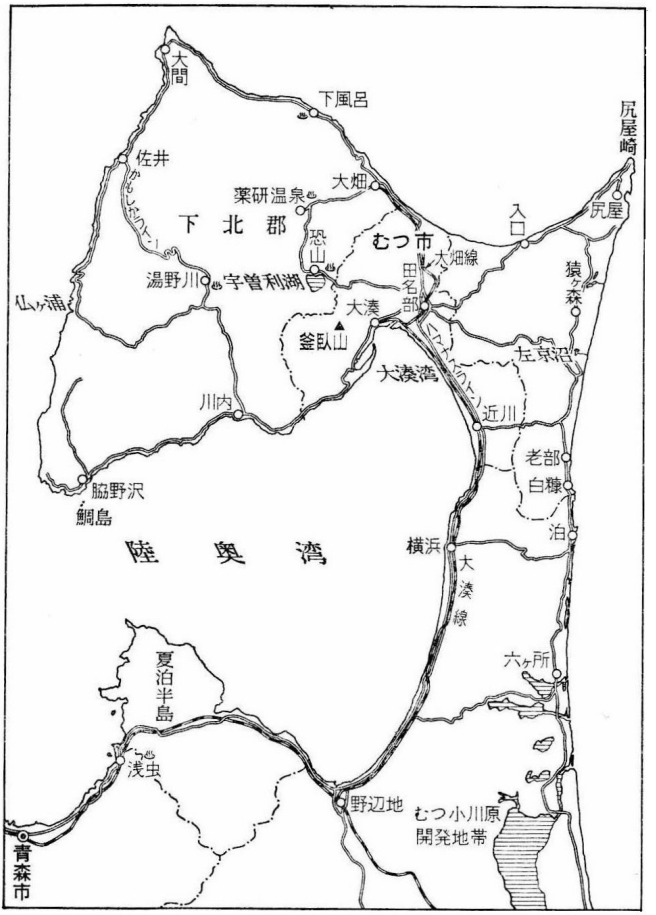
著　者　中村亮嗣（なかむらりょうじ）

発行者　岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

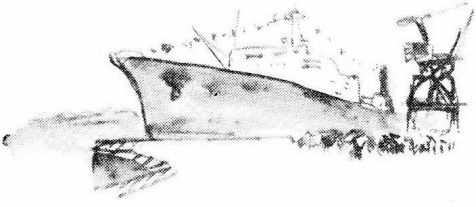
印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします


大間
下風呂
尻屋崎
佐井
大畑
薬研温泉
下北郡
恐山
むつ市
入口
尻屋
大畑線
田名部
猿ヶ森
湯野川
宇曽利湖
仏ヶ浦
大湊
釜臥山
左京沼
大湊湾
川内
近川
老部
白糠
脇野沢
鯛島
泊
陸奥湾
横浜
大湊線
夏泊半島
六ヶ所
浅虫
野辺地
むつ小川原開発地帯
青森市

目

次



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

原子力下北にくる……一
翌日の新聞にぼくの行動がのった……一六
原子力を迎えたはじめての春……三〇
市民はなにかを感じはじめた……四二
むつ市が世界の玄関となる？……五三
「反対の声も今は下火」……六三
市長へ手紙を出す旬間……七八
放射能は必ず出ます……九一
原子力災害の保障は一人当り一〇万円……一〇六
日本でも原爆の研究がされていた……一一九

県漁連会長と今後の約束をする……一三一
菊池革新市長誕生する……一四八
白糠海を守る会結成される……一六四
ぼくも科学者の仲間になった？……一七七
蒸気発生器の中にボルト発見……一九〇
「むつ」深夜出航す……二〇五
四者協定のあとで……二二六
あとがき……二三七

原子力下北にくる

昭和42.8～10

むつ製鉄の話題も忘れかけた昭和四二年頃、ぼくにとっての一番の関心事はむつ市の美術グループ「彩葉」の再建であった。幸いにも浅枝青田先生らの指導がえられ、近所にある紅服装学院の一室を借り毎週火曜日の夜、高校の後輩の堀江和夫君らの若い仲間といっしょに、むつ市の美術ムードづくりにはげんでいた。そしてグループで釜伏山登山をかねスケッチに行ったのが、九月三日の日曜日。むつ市に原子力船の母港設置の報道があったのはその数日前である。

釜伏山の上から眼下に美しい市街を見下ろし、この平和な町もやはり公害から逃れることはできずに汚されるのだろうかと考えると情なくなった。そして「本当に原子力船がくるんだろうか」と山の道を歩きながら話し合った。

むつ市を中心とした下北半島は、本州東北端に斧状に突出し、太平洋、津軽海峡、陸奥湾と三方を海に囲まれ、釜伏山、朝比奈岳など八〇〇メートル前後の連峰が屋根となり、斧の柄の部分に下北丘陵、太平洋岸に海岸段丘が発達している。

釜伏山

冬の雪は少ない方だが、春にはヤマセと呼ばれる寒い東風が吹き、晴れる日は少ない。

旧軍港の大湊町と、旧会津藩士が中心の田名部町とが合併して市政がしかれたのは昭和三四年九月。祭の形もちがうように、何かにつけて異なる両町は市の名前もゆずらない。そこで「大湊田名部市」なる日本一長い名前になったが、うんざりした市民は、新市名に強い関心をもち、宇曽利市、下北市、恐山市、釜伏市、陸奥市などさまざまな名称を考えては論議に花を咲かせた。そして一時は陸奥市が採択されるような曲折をへて、三五年八月に全国でもはじめてのひらがな市名の「むつ市」と改称され、三階建の新庁舎が両町の中心の田園地帯に建てられた。

新生むつ市の基本政策は「田園工業都市」づくりと定められ、砂鉄を利用した下北開発の工業誘致に全力がかたむけられた。その結果、三八年八月には、むつ製鉄株式会社が設立されたが、初代杉山勝雄市長はこれに政治生命をかけ、はじめの所属党籍の社会党を陳情に有利との理由で自民党にくらがえしてまでがんばった。にもかかわらず、

四〇年に技術援助をする三菱系四社が要求する資金九〇億円に対し出資先の経済企画庁が難色を示したため、経済的に採算があわないとの理由で、閣議はむつ製鉄の解散を了承、砂鉄による下北開発は夢と消えた。期待が大きかったためか、落胆と疲労が重なって、九月に杉山市長は亡くなった。下北は開発の話が出てはだめになるということをくりかえしつつ、次第に政府不信がたまってきていた。原子力船の話が出たのは、そんな時だったのである。

九月に入ると各新聞はいっせいに原子力で埋めつくされた。安全か、危険か、軍事利用の問題、地域開発につながるかなどの話題がわれわれのメンバーにももち上った。「もうあそこでは泳げなくなる」、「テレビでこの下北をずいぶん貧乏に写していた」、「アメリカの原子力船の母港ガルベストンは、離れ島にあり、すごい水量の二本もある川の水で放射能を洗っている」、「一〇月いっぱいに母港をきめなければならないそうだ。二ヵ月くらいで結論がだせる問題だろうか」などと話はつきない。

その時までは、原子力といっても雲をつかむような話であるというのが大部分の市民の気持であった。原子爆弾や科学マンガの世界、それよりいくらか知っている人でも、東海村原子力研究所ぐらいまでの知識だっただろう。一方では、その頃、原子力技術者の生活をテーマにしたドラマがテレビで放送されていたので、原子力にほのかなあこがれをもっていたこともあったようだ。そのようなすばらしいエンジニアがこの町にやってくるという期待と不安の入り混

じった気持も大きかった。

ぼくは昭和九年にまだ軌道馬車が走っていた田名部町に生れ、田名部高校を卒業したが、少年時代からの夢として画家を志していた。しかし、当面は技術を身につけたほうがよいということで、美術の先生のお世話で歯科技工士になった。そして、夜は浅枝青田先生のところにお邪魔してはいろいろと話しこんだものだった。先生は「これからの絵かきは、ただ絵をかくだけではだめだ、画家は社会のトップに立ってみんなをリードしていかなくてはならない。その精神は、画家で科学者だったレオナルド・ダ・ビンチ以来、四世紀も空白になっている。それをわれわれがやらなければならない。西洋の文学者の集りでは、文学の講義でもやるのかと思うと、すぐ黒板に数式なんか書いて数学や科学の話をはじめるそうだね。それが西洋の文学の重厚さを出しているんじゃないかな。これからは科学の時代だ、まず科学の勉強をしなくては……」と語り、新鮮でつきない科学の話題は、少年から青年への過渡期にあるぼくにはどこまでも面白かった。

その頃、『朝日新聞』に湯川秀樹氏の「旅人」が連載されていた。その中で少年時代に老壮の思想にすごく感激し、湯川中間子の発想もその東洋思想からきているとあったことに驚いた。その話をすると、浅枝先生はしばらく考えていたが、「そうかもしれない。老子は非現実主義といわれているが、老子ほど現実的でそしてスケールの大きい考え方をしているものはいない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ヨーロッパ人にはそれがなかなか理解できないのだ。それはあまりにも二元論の考えにギリシャ時代から固まってしまっているからだ」と話され、その頃来日したロシア系アメリカ人のガモフ博士のことなど話題がつぎからつぎへと出てきて、いつも夜中になってしまうのだった。われわれは空想の翼を伸し、さらに話題をひろげて行った。ぼくは原子力の記事のスクラップをつくり、書店にある原子力関係の科学雑誌はポケットマネーのあるかぎり買い、『ガモフ全集』などで本棚をかざるようになった。そして自分なりに原子の構造のパターンをいろいろと組み立ててはつくりかえて行く図案的な美しさに、自然の美をどこまでも求めたデンマークの物理学者ボーアのことを考えずにはおられなかった。湯川博士も、その美の構成者たらんとボーアの弟子になったのかな、とも考えたりしたものだった。

町には「原子力船母港反対市民会議」が結成され、「一〇月一日原子力船母港設置反対むつ大集会」のポスターが貼られ、広報車が走りまわっていた。いまや原子力問題は目の前にあった。もはや一日たりともむだな時間を費やすことはできない。ぼくは本棚にある原子力の本を読み関係記事をまとめ、『東奥日報』の「明鏡」欄に投稿した。「原子力船母港への疑問」と題したぼくの最初の意見を全文ひいてみよう。

「事業団の説明では原子力船が、万が一の場合は半径五〇メートル離れておれば大丈夫だというが、昭和三二年のY紙によれば、東大の中村誠太郎助教授は、アメリカの原子力潜水艦

シーウルフ号の事故があったとされ、大体これらの事故は風下五〇キロぐらいまで危険を及ぼす可能性があるという。現在は技術が進んでいるとはいえ同じ加圧式エンジンを使って五〇メートルと五〇キロとでは大きな差があり、ここからして、素人に対しなにか隠しているのではないかと、不安をいだく。

もし本当に平和利用でガラス張りの中での計画ならば、一〇年も前からの計画、そして母港の大切さがこんなにも重要ならば、何年か前から予定候補地として通知があってよいはず、そこになにか軍事的なにおいがしないわけでもない。何カ月か前のニュースでは原子炉かなんかの候補地として、下北郡東通村があげられたということを聞いたことがあるが、このむつ市が二番目の中に入っていたならば住民になんらかの形で通知があってよいと思う。

それにむつ製鉄、ビート問題など、政府の甘言にだまされたという感情があまりにも強い。母港についての結構ずくめの話は気持が悪いとは、いつわらざる住民の心理だ。本当に平和のため、そして近代科学のため一〇〇年の計画をもって行うならば、何年かゆっくり話しあってその後に行うべきだ。

将来、原子力商極船も予定に入っているという。昭和三三年九月、ジュネーブ会議開会演説でペラン議長は、後進諸国は原子力平和利用をあせってはならないこと、むやみに急いでもだめで、地道な積上げをしなければならないとのべている。このことばをかみしめてみた

い。」

そうするとすぐ、同紙編集部がこの投書をあざ笑うように「とくに原子力船母港問題は、科学的、専門的な知識を要する。しかも、日本の権威ある学者たちが、その安全性を強調している問題である。すでに反対運動をしているからといっても、なまじっか危険性を振りまわす反対論では、かえって失笑を買うばかりであろう。よほどの勉強が必要である。といって、いくら一夜づけの勉強をくりかえしても、その道の素人は、しょせん素人にすぎない。むしろ、自らの半可通を忘れて、知ったかぶりをするのは、かえって危険であり、はた迷惑でもある。とすれば危険性を立証するくらいめんどうなことはない」と書いた。こういった意見が主流だったのだ。

そして、九月二八日にやはり『東奥日報』に、原子力船事業団の理事、西堀栄三郎氏の「原子力船の母港」と題するつぎのような文章が掲載された。

「そもそも今日原子力の平和利用を恐ろしいものだ、危険なものだと思っている人は、文明から置きざりにされた原子アレルギー患者で、もはや時代おくれもはなはだしい。人類はもはや原子力を、火や電気のように使いこなしてその生活を豊かにしている。あの自然条件のきびしいスウェーデンでは、電気はもとより、家庭の暖房さえも原子力でやっているではないか。日本でもすでに東京方面の電気には東海村の原子力発電所でおこした電気が交じって

いる。それなのに原子力の初期時代におこった原子炉事故と、あのいまわしい原爆の被害とを結びつけて「原子」の字のついたものは何でも恐ろしいものだと宣伝しているのは、火を恐れる野獣の類である。……

原子力の平和利用は、原爆とは異なり、もはや十分に高い安全性が得られるようになったことは、約五百という原子炉がその付近の住民に被害を与えたことがないという事実からも明らかである。ましてや、この安全であるという事実を、無理に曲解せしめて、自分たちの自己宣伝の道具に悪用しているものは住民の敵である。日本国民を迷信の中に閉じ込め、いつまでも低開発国にとどめおこうとするものが、自ら革新だといっているのは何たる矛盾だろう。……

今度むつ市に設置しようとする原子力船の母港は、すでに全国いたるところにある、同種の原子力施設のいずれよりも小規模のものしか設置しないのに、危険を理由に設置反対を叫んでいるのは、全く自ら墓穴を掘るものであって、心ある同情者を日々失ってゆく。現にあれだけ、放射線の危険を叫んでいた、原子力潜水艦も何の放射線も放出のないことが証明されて、から念仏におわってしまい、反対理由を「ベトナム」へと転換せざるを得なくなったではないか。」

これは、原子力問題を真剣に考えてみようとする人々に水をかけるものだった。

一〇月一日、むつ市役所前の広場で集会が開かれた。ぼくは会場の横でデモ行進を見送った。一般市民の反応はなく、むしろはじめて見るデモの列を珍しく眺めるだけであった。デモの日の夕方、町はずれの食堂へ入ると奥で年輩の人たちがぼそぼそ話をしているのが聞える。「なんぼ危険なもんだが、つくってみねいばわがらねいべな。」原子力施設はつくってからではおそいということがわからないのだ。

翌日、「原子力船母港に反対しよう、原子力からむつ市を守る会」という墨汁で書いた素人っぽいポスターが貼られているのを見た。町名番地電話番号だけのポスターだ。昨年クリスマスに同じ町内にある教会へぼくの描いた油絵を一点寄贈したことがあり、そこの牧師の息子が平和運動をしているという話を聞いたことがある。彼かもしれない。これからの市民運動は既成の組織よりむしろ自由な若いエネルギーが中心になるのも時代の要求だ。早速ダイヤルをまわす。そして教会と幼稚園をかねる事務所を訪れたのは静かな秋の晩。やはり思っていたとおりの若者、松井真君だった。すぐに今後のことについていろいろと話をし、まず明後日の晩、原子力船推進の講演会にいっしょに出かけ、ポスターを書くことをきめる。それにしても考えを素直に表面に出さない東北人とちがって、二〇歳そこそこの松井君の思ったことをずばり言い行動に移す態度はうらやましい。翌日はポスター書き。「ドロン船に乗るな」、「原子力船はキケン」……。

しかし、町は原子力船賛成ムードだから「原子力船母港をむつ市に」という原子力船開発事業団の立派なポスターのそばには貼りにくい。どうも目立たないところばかりに貼ったような感じだ。だれが書いたのか、賛成派の手書きのビラも一枚あった。「船に乗りおくれるな。原子力船賛成。」

ポスター貼りの翌晩は講演会だ。寒い小学校講堂にあぐらをかき、松井君とじっと聞く。講師は原子力船母港をすすめる側の日本原子力船研究協会会長山県昌夫東大名誉教授らの一行五名。これからの原子力時代における海運事業、原子力潜水船の必要性などの話である。司会を除いて講師は年輩の人ばかり。河野市長はわきの方で椅子に腰かけて聞いている。やがて質問の時がくる。ぼくは二番目だった。

「アメリカのシーウルフ号は、風下五〇キロメートルも被害を及ぼすといわれております。事業団は万一の時は五〇メートルも離れておれば大丈夫だといわれておりますが、どうしてこんなに差があるのですか。」

「はっきり五〇キロということはないと思います。」

「はっきり五〇キロと書いてありますよ、そのスクラップをもっています。」

「それは記事の効果を出すためにそう書いたんじゃないですか。」

「中村誠太郎さんの記事ですよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton